

木様蜂窠織炎ニ就テ後篇

Weitere Studien über die Holzphlegmone.

Von Dr. SHOKUN BOKU.

(z. Z. Professor der Pathologischen Anatomie a.d. mediz. Akademie zu Keijoo.)

京城醫學專門學校助教授

朴 昌 薰

目 次

一、緒 言

二、更ニ追加スル自家ノ新症例

三、原 因

細菌學的研究

免疫學的研究

四、病理解剖學的研究

五、血液像所見

六、結 論

文 献、附 圖

一、緒 言

木様蜂窠織炎ノ稀有ナルハ前篇(一)ニ述べ盡シタル所ニシテ、其ノ定義上ノ疑義ニ就キテモ亦、從來幾多ノ症例本病中ニ誤算セラレタルモノ尠カラザルヲ指摘セリ。本病ノ原因ヲ追究シ本態ヲ明カニセントスルニハ、其ノ症例ノ多數ニ就キ精細ナル組織學的乃至細菌學的研究ニ待ツベキハ勿論ナルガ、未ダ一人ニシテ余ノ如ク多數ノ例ニ遭遇セルモノアルナシ、予ノ前篇ヲ草スルニ當リ、原因論及ビ病理組織學的研究ニ關シ、說地スルコト極メテ簡ナリシハ、之レヲ異日ニ譲リテ、深ク研究セルノ後チ公表センガ爲メナリシニ過ギズ。而モ其ノ間更ニ新タナル四例ヲ追加スルノ幸機ヲ得タルガ故ニ予ノ年來ノ經驗及ビ實驗成績ヲ舉ゲテ茲ニ後篇トシテ諸學者ノ批判ヲ仰ガントス。

二、更に追加スル自家ノ新症例

曩キニ予ハ前篇ニ於テハ總八例ヲ報告セシガ續イテ第九例ヨリ第十二例ニ至ル新四例ヲ得タリ更ニ追加報告スベシ。

第九例 三十一歳ノ男子 官吏。

既往症 遺傳上徴スベキナシ。

患者ハ生來強壯ナリシガ、十二年前脚氣ヲ患ヒテヨリ、心悸亢進ヲ訴ヘ歩行ニ際シ時々膝關節ノ疼痛アリ。花柳病ノ既往ナシ。大飲酒客ニシテ又大喫煙家ナリ。二十六日前長時間勤務ノ後チ左側頸部及ビ同側肩胛部ニ輕キ緊張感アリ、自ラ按摩シテ偶然拇指頭大ノ可成リ硬ク、皮膚ト堅ク癒着シ移動セザル無痛性腫瘍ヲ認メシガ、該腫瘍ガ依然無熱無痛ノ間ニ漸次増大スルヲ以テ冷濕布ヲ施セシニ一時輕快ノ徵ヲ示セリ。然ルニ發病後約十日ニシテ更ニ増大シ、之ト同時ニ頸ノ後屈、右屈並ニ左右廻旋不能トナレリ。三日前朝鮮總督府醫院外來患者ノ一人トナリ、クレデー氏軟膏塗布及ビ冷濕布ヲナス。昨日ヨリ初メテ輕キ熱發感アリ、呼吸困難並ニ嚥下困難ナシト云フ。發病後毫モ體力ノ消耗ヲ來サザリシモ、食嗜ハ左程良ナラズ。便通一日一行。

現症 身長大、骨格ノ發育及ビ榮養共ニ良。皮膚濕潤ヨク緊張、貧血ナラズ。脈膊中等大、整調ニシテ更ク緊張シ、一分時九十五至ヲ算ス。頭蓋ニ異常ナク、顔貌苦悶狀ヲ呈セズ。眼、耳及ビ鼻等ニ異常ナシ。口唇ニ變化ナシ口腔内ヲ窺フニ患側下顎臼齒ノ一缺損シ、其根端ノミ猶ホ殘存ス。舌ハヨク濕潤シ苦ヲ蒙ラズ、扁桃腺ニ異常ナキモ咽頭粘膜稍々充血シ、咽頭扁桃腺肥大セリ。肺臟打診上異常ナシ。心臟打診上異常ナキモ聽診上心音亢進セリ腹部正常、上下肢ニ異常ナシ。單ニ兩側鼠蹊腺ノ二三輕ク腫脹セルモ硬カラズ、ヨク移動ス。ワッセルマン反應陰性、ビルケ反應陽性。尿ニ變化ナシ。局部所見 視診上頭首少シク左側傾。頸部ノ左右兩側ヲ比較スルニ、左側ハ強ク腫脹ヲ呈シ、前方ハ同側胸鎖乳頭筋ノ前緣後方ハ項ノ正中線迄、上方ハ乳嚢突起ノ直下ヨリ始マリ、左耳ノ直後ヲ圍繞シテ下顎隅ト境シ、下方ハ

同側鎖骨ノ上方三横指ニ瀾漫セリ。之ヲ破ヘル皮膚ハ一樣ニ緊張シ、中央部ニ於テ淡キ赤葡萄酒色ニ着色ス、靜脈ノ怒張ナシ頸ノ運動ヲ命ズルニ前屈ハ幾分營爲セラルルモ、後屈ハ全ク不能ニシテ、左屈ハ可能ナルモ右屈及ビ左右廻旋ハ全ク不能ナリ。下顎運動自由。觸診上腫脹ノ境界ハ視診上ノ所見ト略ホ一致シ、表面平滑ニシテ結節狀ナラズ、皮膚及ビ深部ト堅ク癒着シ移動シ難シ。腫瘍全體ハ板狀硬固ニシテ、單ニ中央ノ皮膚着色セル一小部分ニ於テノミ稍々軟ク指痕ヲ殘ス。此部ノ深部ニ波動アリ、到所壓痛ナク、熱カラズ、患側頸動脈ノ搏動ヲ觸レ難シ。頸部淋巴腺ノ腫大セルモノナシ。

經過 八月十八日入院。體溫最高三十八度五分、脈膊一分時九十二至。

八月十九日 手術。術前ノ體溫三十七度八分。正規ノ消毒ト「エーテル」全身麻醉トノ下ニ手術ヲ行フ。先ヅ腫脹ノ中央部即チ左側胸鎖乳頭筋ノ走行ニ一致シテ約七糧ノ皮膚切開ヲ加ヘタルニ、刀刃ニ強キ抵抗ヲ覺エ、組織著シク鞏固ナリ。皮膚層ハ肥厚シ厚徑約一糧ヲ有シ、貧血蒼白ニシテ出血多カラズ、只暗紅色ノ血液少シク流出セルノミ。皮下組織、筋膜及ビ筋肉層ハ其ノ肥厚更ニ甚シク鞏固ニシテ、全ク腱樣乃至ハ軟骨樣硬度ヲ有シ、銳的切開モ將又鈍的排離モ共ニ容易ナラズ、漸クニシテ筋肉ヲ鈍的ニ排開シ其ノ下層ニ小膿瘍ヲ發見シ得タリ。皮膚ヨリ膿竈ニ至ル迄三・五糧、膿ハ黃色ニシテ甚ダ濃厚ナルモ、顆粒狀物ナク且ツ豚脂樣ナラズ、全量約三・五錢ヲ排膿シ、皮膚ヨリ膿竈ニ至ル全經ヲ通ジ試験的切片ヲ取リタルノ後チ、後方項部ニ近キ部ニ對孔ヲ穿チ綿紗ヲ挿入シテ手術ヲ了ス。

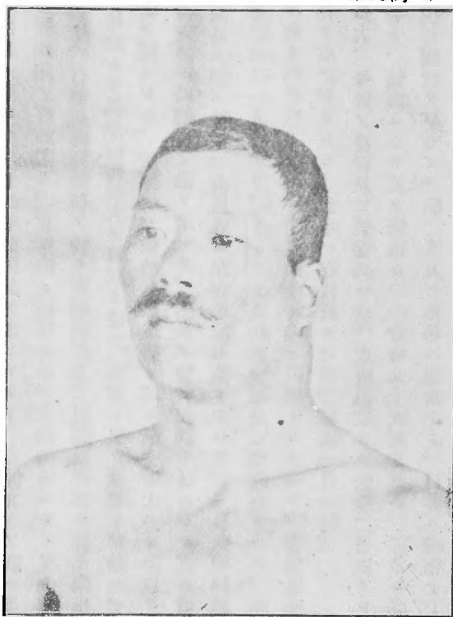
二十二日 體溫三十六度五分、創液僅少ニシテ疼痛甚シカラズ、浸潤ノ硬度ニ變リナキモ、大サ幾分縮小セリ。二十四日體溫三十六度五分、頭首ノ運動ハ各方面ニ亘リ營爲シ得ルニ至レリ。二十五日創面淺狹トナリ分泌物瀦溜

ナシ、「ドレイン」ヲ除去シ、之ニ代フルニ「クロラミンT」濕布「ガーゼ」「タ
ンボン」ヲ以テス。二十六日。硬キ浸潤ハ日ヲ追フテ軟化シ、創面縮小シ、
分泌物依然僅少ス。

八月二十七日退院ス。全身狀態ハ甚ダ良好トナリ、入院當時ニ比シ元氣旺
盛トナレリ。局部所見トシテ左側頸部ニ大小二箇ノ創面アリ、何レモ其ノ肉

(第一圖A) 患者 新○國○ ↑ 三十一歳

診斷 左側頸部木様蜂窩織炎 (自家症例中)
ノ第九例



(第一圖B) 患者 安永天 ↑ 二十八歳

診斷 頸部木様蜂窩織炎 (自家症例中)
ノ第十例



芽面健全ニシテ鮮紅色ヲ呈シ、膿汁ノ少量ヲ分泌ス。創縁左程知覺過敏ナラ
ズ、出血少シ。大ナル創面ハ胸鎖乳頭筋ノ走行ニ一致シ長サ約六糎、幅中央
部(最モ廣シ)ニ於テ三糎。小ナルハ其ノ後ニ在リ、對孔ヲ造レル部ナリ。
是等兩創ノ創深ハ淺クシテ瘻孔ヲ有セズ。創圍ノ手術前ニ板樣硬固ナリシ浸
潤ハ甚ダシク縮小シ且ツ大ニ軟化セルモ、未ダ稍々硬シ。咀嚼並ニ嚥下ノ障

碍、呼吸困難等ナキモ、頭首ノ運動ニ際シ牽引様感アリテ輕キ障礙アリ。
轉歸 患者ハ退院後引續キ某醫ノ治療ヲ受ケタルガ、創面ノ治癒速ナリシ
ト云フ。九月十五日再診セシ時ハ、退院時ノ大小兩肉芽創ハ全ク瘻痕ヲ形成

シテ治癒シ、浸潤モ痕跡ダニナク、頸部ノ運動ハ全ク常態ニ復セリ。
第十例 二十八歳ノ男子 農業。
既往症 遺傳上特記スベキコトナシ。

患者ハ生來強壯ニシテ幼時麻疹及ビ天然痘ヲ經過セルノ外著患ヲ知ラズ、殊ニ花柳病ノ既往ナク血痰、短キ咳嗽、盜汗乃至ハ午後ノ熱發等ニテ苦シミシコトナシ。昨春左側化膿性頸下淋巴腺炎ノ切開治癒後、其ノ下方ニ示指頭大ノ無痛性淋巴腺ノ腫脹ヲ殘存セシガ、其ノ後時日ノ經過ト共ニ自然消失セリ。然ルニ約二週日前ヨリ偶然左頸部ニ牽引樣感アリテ、左鎖骨上窩部ニ漸次無痛性ノ固キ腫脹ヲ來シ、開口並ニ咀嚼困難アリ、輕キ呼吸困難ヲ感ジ、頸部ノ運動障礙ヲ起セリ。發病數日後輕キ熱發感、咽頭癢痒感、咳嗽多量ノ咯痰、四肢痛(感冒?)アリ、然レドモ是等ノ症狀ハ漢方ノ感冒藥ノ内服後直ニ消退セリト云フ。

現症 甚ダ強壯ニシテ榮養佳良ナルノ男子、皮膚ヨク濕潤シ、血色ヨシ。脈中等大、ヨク緊張シ整調、一分時七十二至。頭部、胸部及ビ腹部ノ諸臟器ニ異常ナク、單ニ腫脹在ル部ノ肺打診音短ニシテ聽診音微弱ナルノミ。ワツセルマン及ビビルケノ兩反應共ニ陰性。尿ニ變化ナシ。

局部所見 望診上頸部ノ左側上三分ノ一ヨリ下方ハ左鎖骨下窩、前方ハ前頸部ノ中央、後方ハ側頸部ト項部トノ境界線ニ至ル間ニ瀰漫セル腫脹アリ。上方ノ皮膚輕ク浮腫狀ニ緊張シ、中央部ハ赤葡萄酒色ヲ呈ス。開口運動著シク障礙セラレ、咀嚼運動又不充分ニシテ、顎ノ運動モ亦全ク不能。觸診上腫脹ノ境界明瞭ニシテ、其ノ大サ望診上ノ所見ト一致シ、硬度木板樣ニ固シ、皮膚ト強ク癒着シ、中央ノ皮膚着色セル箇所ニ於テ僅ニ波動アリ、腫脹ハ壓痛アルモ甚シカラズ。

經過及ビ轉歸 四月二十日初診。體溫三十七度九分、局部ニクレデッド氏軟膏塗布、硼酸水濕布ヲ施シ、外來通院ヲ命ズ。二十四日體溫三十八度六分ニ上昇シ、腫脹中央部ノ波動ハ愈々著明トナル。正規ノ消毒ト「エーテル」全身麻醉トノ下ニ切開ヲ施セラレタルモ、不幸ニシテ事情ノ爲メ著者自ラ目撃スル能ハザリシニヨリ手術所見ノ記載ヲ缺如ス。其ノ後患者ハ引續キ本院外來治療部ニテ受療シ、約一箇月半後全治セリト云フ。

第十一例 三十八歳ノ女子 農業

既往症 遺傳的疾患ナク、家族史上結核又ハ微毒ナシ。

患者幼時天然痘及ビ麻疹ヲ經過セリ、數月前偶然右側背部ニ嚮腫ヲ生ジ漢醫ニ受診シテ荊棘ニテ切開ヲ受ケ排膿シ其ノ創面未ダ治癒セズ然ルニ約一箇月半前ノ某夜熟睡中醒覺シタルニ項部牽引樣感アリ、自ラ木枕ニテ項ヲ壓迫シタルニヨルナラント思考シ放置セシガ、其ノ後漸次局部固ク腫脹シ來リ該腫脹ハ周圍ニ増大スルト同時ニ、頸部ノ運動ヲ妨ゲラレ、開口不能及ビ嚥下困難ヲ來スニ至レリ、疼痛全ク無キモ時トシテ壓迫樣感アルコトアリ、熱ハ全ク缺如ス、呼吸困難ニ陥リシコトナキモ咀嚼及ビ嚥下困難ノ爲メ食事ヲ攝ル能ハズシテ最近甚ダ衰弱シ來レリト云フ。

現症 身長中等、骨格ノ發育良、榮養中等ナルモ、全身ノ皮膚弛緩シ甚シク蒼白ニシテ、粘膜亦貧血ス脈膊細小整調ニシテ一分時百二十至。頭部ノ毛髮容易ニ脱落セズ、剃毛後見ルモ癬痕ナシ。顔面浮腫狀ヲ呈シ、頰部及ビ下頸部瀰漫性ニ腫脹セリ、眼、耳及ビ鼻ニ異常ナシ、口腔ハ開口不能ノ爲メ檢知シ得ズ、然レドモ患者ハ常ニ齒牙ノ數箇動搖シ齶齒多カリシト云フ。胸廓ニ形狀並ニ大サノ異常ナク、肺臟ハ兩側背部ノ聽診音稍々鋭ク、心音ハ允進セリ、腹部臟器ニ異常ナシ。ワツセルマン反應及ビビルケ反應共ニ陰性。尿ニ異常成分ナシ。

局部所見 頭首ハ項部腫瘍ノ爲メ前胸部ニ向ヒ約百三十度ニ前屈シ、頸圍ハ甚ダ太シ、瀰漫性腫脹ハ主ニ項部ヲ中心トシテ占居ス。其境界銳利ナラザルモ、凡ツ上界ハ略ボ左右兩耳殼上緣ヲ連絡セル線上ニシテ、下界ハ兩肩峰突起ヨリ下方へ突隆ヲナセル線上(項ノ正中線ニ於テハ髮際下一四釐ノ所ニ迄及ブ)ニアリ、左界ハ左頸動脈部迄、右界ハ右頸動脈部ノ後方約一釐ノ所ニアリ。皮膚浮腫狀ヲ呈シ、髮際下ヨリ腫脹ノ下部ニ至ル間ノ所、約超小兒手掌大ノ圓キ部ハ赤葡萄酒色ニ發赤セリ、發赤部ノ邊緣ハ銳利ナラズ、窩又ハ溝狀ヲ呈スル所ナク、靜脈ヲ怒張セルナシ。開口運動全ク不能ニシテ硝子製ノ

舌壓子ノ挿入スヲ許サズ、咀嚼運動元ヨリ不能ナリ、頭首ノ運動ハ前後屈、左右屈ハ勿論左右旋ヲモナス能ハズ。觸診上腫脹ノ全部ニ亘リ厚キ木板様ニシテ恰モ硬性瘡ヲ觸ルル如キモ、表面平滑ニシテ結節狀ナラズ、皮膚及ビ深部トハ堅ク癒着シ毫モ移動セズ、皮膚ニハ指痕ヲ輕ク殘ス。腫脹ノ爲メ全頸椎殊ニ第七頸椎ノ棘狀突起後頭結節並ニ兩側ノ下顎隅角モ觸知セラレズ。腫脹ハ兩側ノ下顎隅角部ニ特ニ著シクシテ此部ニノミ輕キ壓迫痛ヲ訴フル外、爾他ノ部ニハ壓痛ナク、何處ニモ波動ナシ、顎下淋巴腺及ビ頸部淋巴腺ノ腫脹ヲ觸レズ。

經過及ビ轉歸 四月十七日入院。體溫三十六度九分、局部ニクレデー氏、軟膏ヲ塗布シ溫濕布ヲ施ス。十八日。體溫三十八度四分(患者ハ發病後初メテノ發熱ナリト云フ)、十九日。太キ針ニテ局部ノ試驗穿刺ヲナスモ膿出デズ體溫再ビ平溫トナル。翌日腫脹ノ硬度稍々減ジ、殊ニ中央部少シク軟化ス。開口稍々可能トナリ、咀嚼モ幾分營爲セラル、頸部ノ緊張減ゼリ。二十三日腫脹ノ硬度ハ更ニ減ジ且ツ縮小ス然レドモ著明ナル波動ハ觸レ難シ。

四月二十四日手術。「エーテル」麻醉ノ下ニ項部正中線上ニ於テ、後頭結節ノ下約三糎ノ所ヨリ殆ド第七頸椎部ニ至ル間ニ皮膚切開ヲ加フルニ、刀ニ甚シキ抵抗ヲ覺エ堅固ナルコト鞏固ナル牛皮ヲ切ル如シ、深部組織ハ到底鈍的ニ離開スル能ハズ、刀ヲ以テ深く切ルニ更ニ固ク硬度恰モ軟骨ヲ切ルガ如シ皮膚及ビ皮下組織ハ白色ニシテ出血少シ。筋肉モ固有ノ色澤及ビ質ヲ失ヒテ臃狀ノ如シ。然ルニ殆ド脊柱ニ近キ所ニ至リ一動脈ノ出血スルアリ、組織ノ餘リ固キ爲メ止血鉗子ニテ之ヲ撮ムニ非常ニ困難ヲ覺エ、漸ク周攢結紮(Diey'stechnique)ニヨリ止血シ得タリ。更ニ深部ニ進ミ頸椎ヲ觸ルル時ニ該部組織ノ一小部ノミガ硬度異様ニ脆ク探指ヲ左方ヘ向ケシニ濃厚ナル黃色良性膿液イテ出ツ(約三・〇糎)。此膿液ヲ開大シ「ゴム」管ヲ送入シ、創ノ下方ニ於テ試驗的切片ヲ切取シ綿紗ヲ詰メ込ミ術ヲ了ル。皮膚ヨリ脊柱ニ至ル間ノ全厚徑凡ソ五糎。

手術後嘔吐數回アリシ外他ノ著變ナシ。

五月六日體溫三十六度三分、創面縮小シ膿ノ分泌少ク、硬度減ズ、開口及ビ咀嚼運動ハ全ク自由トナレリ。八日、體溫三十六度五分、創面更ニ淺狹トナリ硬度減ズ、二十二日、體溫三十六度五分、創面全ク治癒シ、浸潤亦全ク去リ、硬度殆ド普通トナル。

五月二十七日退院。全身狀態入院當時ト同ジク、體重ノ減少ヲ來サズ。創面ハ瘰癧形成ヲ終リ、頸部ノ運動モ全ク恢復セリ。

第十二例 三十歳ノ男子 商業

既往症 家族史上結核、梅毒等アルモノナク、患者モ梅毒ノ既往歴ナシ。七月左側乳房部ヲ打タレシコトアリ、其數週後ヨリ熱及ビ盜汗等ナシニ左側胸痛アリ、時トシテ乾咳ヲ混ヘリ、爲ニ八月二十八日朝鮮總督醫院内科ニ外傷性神經症ナル診斷ノ下ニ入院セリ。當時觸診並ニ聽診上別ニ胸部ニ異常ナク、レントゲン線検査上兩肺炎部ニ輕キ浸潤アリシノミ、肋骨ニ異常ナカリキ、入院以後ノ體溫モ三十七度内外ヲ僅ニ上下シ、午前午後ノ熱差一度以内ヲ保チ、九月四日ニ至リ初メテ體溫三十七度六分ニ昇リ、輕キ全身違和アリ、八日頃ヨリ疼痛ハ去リシモ、代リテ左側々胸部ニ扁平ナル固キ浸潤ヲ觸レ、漸次増大スルニ至レルヲ以テ十三日予ニ診ヲ乞フニ至レリ。

現症 體格中等、榮養佳良ニシテ、皮膚ハ貧血ヲ呈セズ、脈膊ヨク緊張シ一分時七十五至。頭部並ニ頸部ニモ異常ナク運動障礙モナシ、胸腹腔内臓ニモ異常ナシ、兩側鼠蹊淋巴腺ノ數箇大豆大ニ腫脹セルモ疼痛ナク且ツ硬カラズ、脊柱ニ壓痛點ナシワツセルマン反應陰性。

局部所見 望診上左側々胸部ハ反對側ニ比シ瀰漫性ニ稍々腫脹シ、肋骨ノ輪廓明瞭ナラズ、皮膚稍々緊張セルモ變色ナシ。觸診上境界餘リ確然タラザルモ凡ソ上方ハ左側腋窩、下方ハ第八肋骨ノ下緣、前方ハ左側前腋窩線、後方ハ同側後腋窩線ニ擴大セル類橢圓形ノ腫瘍アリ。表面平滑ニシテ皮膚トハ癒着少ク、深部トハ堅ク癒着シ、之ヲ移行セシメ得ズ。硬度全ク板狀硬固ニ

シテ、自發痛又ハ壓痛ナク、波動ヲ觸レズ、且ツ皮温ノ上昇ナシ、同側腋窩
 淋巴腺ノ腫脹ヲ認メズ、上肢及ビ軀幹ノ運動障礙ナキモ、深呼吸ヲ命ズルニ
 局部ニ輕キ緊迫感ヲ訴フ。
 經過及ビ轉歸 局部ニクレデー氏銀軟膏ヲ塗布シ、冷濕布ヲ施セシニ大ニ

効アリ、腫脹著シク減退セシガ同月十八日事故アリテ退院セリ。其ノ後チノ
 經過ヲ書信ニテ尋ネタルニ退院後引續キクレデー氏軟膏塗布及ビ冷濕布ヲ行
 ヒ約二十日後腫脹全ク去レリト云フ。

以上ノ四例ニ於ケル所見ニ細菌學的並ニ病理解剖學的所見ノ概略ヲ加ヘテ之ヲ前篇ニ於ケルト同ジク一括シ第一表ト
 ナシテ次ニ掲グベシ。

(第一表) 更ニ追加スル自家新症例ノ一括表

例	十	第	例	九	第	號	番
1922	同	第	1922	燕	昌	年	者
	右			男	朴	次	報
	男			三		性	告
	二			一		年	
	八					齡	
業	農		吏	官		業	職
良佳養榮壯強ダ甚			ニ養ビ育ノ骨大、身 良共榮及發骼長			狀	全
			ムノ硬キ腫瘍ヲ認			態	身
シ上感週失巴淋左 漸高ト頸前シ、腺癒側 増部共ヨリ之腫巴 大左牽偶リガ脹一膜 ス腫鎖引テ自殘箇ノ性 脹骨樣左二消リノ切頸			部頸側左			既	
部胸上側同ビ及部頸側左			ズ移軟分一中狀滑表ノ瀾 動シノ小央硬面腫漫 セ、ミ部ノ固板平脹性			往	
ズ移ヲ荷ハ中早腫輕 動呈酒赤央狀ク浮			ズ熱動シニ萄キノニ中緊 カセ、着酒赤ミ於央張シ ラ移色葡淡部			症	
リア痛壓キ輕クヲ痛發自			シ			位	部
出○約性ヨリ切ニ中央 ス死ハ・膿汁長ニ波動部			排五約黃厚ヨ切ニ中央 出死三・膿・開波動部			患	部
			大扁充咽ミノ箇白患 桃血頭殘欠齒側下 腺咽粘存端損一頸 増頭膜ス其類			皮	患
ア障運咀不開口 リ碍動嚼嚙能			シ等困嚙及咀開口 ナ難下ビ嚼			膚	部
能不動運ノ頸			不能運頸左シハ頭 動ノ傾シ少首			痛	疼
ル至ニ分六度八十三日一			ルト五分八十平 ナ分度三十日溫			膿	波
アコレ襲胃中經 リトシハニ寒過						壞	動
シナ化變			シナ化變			疽	化
毒養純球葡釀膿汁ヨ 力粹粹菌菌膿性色ヨ 弱ヲ得培ノ狀性			毒力得、粹培養、球菌純、釀膿性、汁ヨ			ノ	附
			裂彈織束脂檢ナ肉皮 シ力細胞間脂肪鏡上靱膚 其纖細多幼下、內、病變ノ皮 量維多量、結、皮、變、乃、下 減肥量、締、細、並、主、至、組 少厚若ニ變、胞、軟、部、軟、織 セリ増ナル性、ハ、皮、部、軟、及 リ殖結締、ハ、浸、部、骨、骨、筋 ヲ殖結締、ハ、潤、皮、樣、樣、樣			發	近
治全テシニ餘月箇二約			治全後月箇二約			症	臟
右	同		濕布切開 布礪酸水 氏軟膏塗 クレデー			狀	器
						部	ノ
						運	患
						部	部
						運	又
						溫	體
						症	併
						尿	合
						細菌	
						學的	病
						所見	理
						剖	解
						歸轉過經	剖
						療	法

例二	十第		例一	十第	
同年	同右男三四		同年	同右女三八	
業商			業農		
良佳養榮等中格體			早貧ナル養育酪等、身長中 ス血ヲモ中等榮榮ノ發骨、月		
瘍來ル 疼痛起リ後チ腫 房部ヲ打撲セラ 二箇月前忠側乳			セズ、約一箇月 前ノ某夜頸部ニ 牽引様感アリ、 其後局部腫脹漸 次増大ス		
部胸々側左			部項		
着シ昇ナ	平滑深ノ上	硬表面及ビ皮溫	七ゾ	漫性腫移動セ	境界不浮腫狀
ア	機感	際シ	赤、	角部約三・	痛自發
シ	ナ	動	多シ	搖齒齒	齒牙ノ
シナ害障動運肢上體上			能不全動運ノ頸屈前首頭		
温	平		ル	四分八度三十	平温
			リア腫浮ニ面顔		
			シナ化變		
			性陰上養培汁膿		
癒治後月第一約			治全後半月第二		
水濕布、	布、硼酸	氏軟膏塗	右	同	

三、原因

前篇ト重複スルノ嫌ナキニ非ザレドモ、讀者ノ諒解ヲ得ルニ便ナルベシト信ジ、本病ノ原因研究、特ニ細菌學的研究ニ先立チ、左ニ一二參考事項ヲ附記スベシ、但シ蒐集セル症例ハ前篇脱稿後報告セラレタル稻田⁽²⁾村上⁽⁶⁾兩氏ノ各一例及ビ文献上明カニ本病ナリト認メ得ベキモノニ自家ノ症例ヲ加ヘタルモノナリ。

本病ト性別 本病ノ性別ニヨル罹患率ヲ觀ルニ、男子ハ女子ニ比シ、遙カニ大ナル罹病率ヲ示スハ蔽フベカザル事實ニシテ、實ニ三倍強ニ相當スルコト第二表ノ如シ。

(第二表) 性別罹患表

六九	總例數	
	例數	男
五三	ル率	總例數ニ對ス
七六・八%	例數	女
一六	ル率	總例數ニ對ス
二三・二%	ル男ノ數	女一ニ對ス
三・三		

本病ト罹患年齡 本病ニ關スル全報告症例中、年齡記載アルモノ總六十五例ニヨリテ作レル次ギノ二表(第三表及ビ第四表)、一圖(第二圖)ニ就キテ見ルニ、二一歳ヨリ三〇歳ニ至ル迄ノ青年男女ニ最モ多ク、三二歳ヨリ四〇歳ニ至ル並ニ

(第三表) 年齡別及ビ性別罹患頻數表

年齡	例數	報告者	年齡	例數	報告者
3歳	1	Fichtner.	40歳	1	Reclus.
4歳	1	Fichtner.	41歳	1	朴
11歳	1	朴	42歳	1	Capasso.
18歳	1	Krause.	45歳	2	Sick.
20歳	2	Fichtner.	47歳	1	Piccininni.
21歳	3	Boeminghausen.	48歳	1	Powers.
22歳	3	佐々木 Fichtner. 朴	49歳	1	楠田、
23歳	2	Martynow. 長曾我部 Lejars.	50歳	3	關場、
24歳	2	Martynow. 村上	51歳	1	Reclus.
25歳	1	近藤 Thevenot. 朴	52歳	1	太田、關場、
26歳	3	Panzner. 朴	53歳	2	中村、Gilbride.
27歳	1	Merkel. 朴	57歳	2	Powers.
28歳	2	Cortaset. Antonino.	59歳	1	西、Grant.
31歳	1	太田、稻田、朴	60歳	1	Gaansson.
32歳	1	朴	65歳	1	Martynow.
34歳	2	村上	69歳	1	Piccininni.
35歳	2	田島、朴、	72歳	1	Reclus.
36歳	1	Reclus. Mühsam. Krause. Gilbride.	74歳	1	朴、
38歳	1	Gilbride.	80歳	1	Consentino.
39歳	1	朴、	計	50	Krause.
		瀧本、		15	阿久津
					Packer.
					Reclus.

四一歳ヨリ五〇歳ニ至ル迄ノ壯年男女之ニ次ギ、二一歳ヨリ六〇歳ニ至ル迄ノ各十年期ハ、其ノ前後ノ各十年期ニ比シ遙

ニ多キヲ示シ、高齢者ニ多カルベシトセル Reclus 氏ノ推測全ク裏切ラレタリ。又八一歳以上ノ高齢者或ハ稍々疑ハシキ Fichtner 氏ノ第四及ビ第五例ヲ除ケバ、曾テ五歳以下ナル幼兒ノ襲ハレシコトナシ。

(第四表) 十年毎ノ年齢及ビ性別罹患頻數表

年 齡	一—一〇		一一—二〇		二一—三〇		三一—四〇		四一—五〇		五一—六〇		六一—七〇		七一—八〇		計
	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	例數	總例數ニ對スル率	
男	二	三、一%	二	三、一%	一七	二六、二%	八	一二、三%	九	一三、八%	七	一〇、八%	二	三、一%	三	四、六%	五〇
女	一	—	三	四、六%	三	四、六%	四	六、一%	二	三、一%	三	四、六%	一	—	一	—	一五
計	二	三、一%	五	七、七%	二〇	三〇、八%	一二	一八、四%	一一	一六、九%	一〇	一五、四%	二	三、一%	三	四、六%	六五

由是觀之本病ハ働盛リノ壯年者ニ多ク來ルモノナリ。

本病ト全身狀態 初メ Reclus 氏ハ自家ノ經驗ニヨリ、衰弱又ハ惡液質ガ本病ノ發生ニ重大ナル關係ヲ有スルモノナ

ラント云ヒ、Reynier 氏ハ榮養障礙ガ本病ヲ發起スルニ主ナル原因ナラント唱ヘタレドモ、自家ノ實驗十二例及ビ文献上蒐集症例ニ就キテノ統計的觀察ニヨレバ、本症ハ却テ體格又ハ榮養佳良ナル者ニ多ク、兩氏ノ說ニ反スルヲ知レリ。

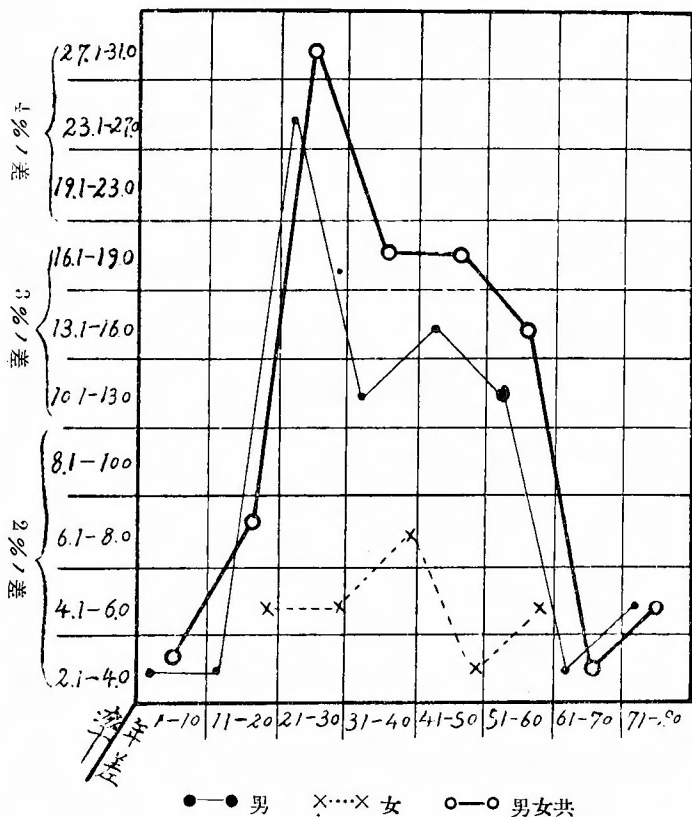
本病ト職業的關係 本病ハ農夫、匠人、勞働者、兵士等ノ肉體的業務者ニ多ク、官公吏、會社員等ノ室内業務者ニ

少ナシ。

本病ト部位的關係 本病ハ初メ Reclus 氏ガ頸部ニノミ發スルモノナラント想像セルモ、次ノ統計ニ於テ明カナルガ如

ク、爾他ノ部ニモ來ルナリ、然レドモ頸部ガ其ノ最も好發スル部位タルニヤ相違ナシ、今其ノ部位別ヲ示セバ次ノ如シ。

(第二圖) 十年毎ノ年齢及ビ性別罹患率曲線)



1 頸部五四例
 右側頸部一七例
 左側頸部一九例
 前頸部一〇例
 項部三例
 兩側頸部三例
 頸部トノミ記シアルモノ二例

2 軀幹一〇例
 側胸部一例
 上腹部一例
 下腹部並ニ側腹部八例

3 四肢六例
 上膊部二例
 大腿部四例
 足部ナシ(Jassano氏ノ報告アルモ記載明瞭ヲ缺ク)

偽實扶的里菌三回

「プロテウス」菌二回

頸部中ノ細別區域ハ上表ニヨレバ、左側頸部次デ右側頸部ニ多ク、却テ項部ニ少キガ如キ觀アレド、其實側頸部ニ發セ

ルモノノ大多數ハ、項部ニ迄瀾漫セルモノナリ。

今各部ニ於ケル發病率ヲ表示スレバ次ノ第五表ノ如シ。

(第五表) 發病部位別表

總數	頸部		軀幹		四肢	
	數	總數ニ對スル率	數	總數ニ對スル率	數	總數ニ對スル率
七〇五四	七七・一%	一〇	一四・三%	六	八・六%	

故ニ頸部ノ發生率ハ、實ニ全數ノ四分ノ三強ニ相當ス。

細菌學的研究

本病ノ病原ニ關シ榮養說、特殊病原體說、化膿性細菌說等アリ、前三說ハ今日全ク其ノ影ヲ沒シ、化膿性細菌說ノミ有カナルハ前篇ニ略述セシ所ナリ。今迄本病ノ病竈ヨリ細菌檢索ノ行ハレタルハ前篇ニ記セルモノニ本篇ニ於テ余ノ更ニ追加スル三例(黃色醗膿性葡萄狀球菌二例、陰性一例)及ビ村上氏⁽⁶⁾ノ一例(黃色醗膿性葡萄狀球菌)ヲ加ヘテ總數四〇ヲ算ス。之ヲ檢出セラレタル細菌ノ種類及ビ回數ニヨリテ分テバ、

黃色葡萄狀球菌一〇回

白色葡萄狀球菌 三回

葡萄狀球菌二〇回

黃色及ビ白色葡萄狀球菌合存セルモノ一回
單ニ葡萄狀球菌トノミ記シアルモノ六回

連鎖狀球菌六回

桿菌二回

實扶的里菌一回

ワクサン氏菌一回

「コクチヂウム」菌一回

重球菌一回ニシテ、如斯多種多樣ノ細菌ガ本病ノ病竈ヨリ直接檢出サレタリト雖モ、葡萄狀球菌ノ檢出サレタル回数ハ正ニ全數ノ半バニ達シ、而モ葡萄狀球菌中特ニ黃色葡萄狀球菌ガ大多數ヲ占ムルハ事實ナリ、已ニ Frenkel ガ全化膿病竈ノ八〇・〇%ヨリ黃色葡萄狀球菌ヲ檢出シ得ベシト說破セリ、化膿竈ヲ造ル傾向アル本病ノ病竈ヨリ、該菌ヲ檢出セラレタルコト白色葡萄狀球菌其他ヨリ遙カニ多キハ何ゾ怪シムニ足ランヤ。

予ノ實驗例中第一例ヨリ第八例ニ至ル症例ノ細菌學の所見ハ既ニ前篇第二表ニ略述セシガ如シ、自餘ノ四例中第十一例ニテハ手術ニヨリ得タル膿汁ヲ、種々ノ培養基ニ移セシモ其ノ成績何レモ陰性ニ終レリ。第九例及ビ第十例ニ於テハ無菌の手術ニヨリ得タル膿汁中ニ其ノ塗抹標本上ニモ、又培養上ニモ「グラム」陽性ノ葡萄狀球菌ヲ認メタリ、之レガ研究ハ以下述ブルガ如シ。

予ハ本病ノ十有餘例中數回黃色葡萄狀球菌ヲ得タリ、然レドモ之ヲ以テ直ニ本病ノ病原體ト速斷スルヲ避ケンニハ、超顯微鏡の病原體ノ有無ヲ檢スルモ、亦無益ノ業ニ非ズト信ジ培養ニヨリ黃色醗膿性葡萄狀球菌ヲ檢出セル第九例及ビ第十例並ニ培養成績陰性ニ終リシ第十一例ノ三ヨリ得タル膿汁ヲ、各倍量ノ〇・八五%滅菌食鹽水ニテ稀釋シ之ヲベルクフエルド氏濾過器ニテ濾過シタル濾液ヲ、家兔及ビ白鼠ニ注射セシニ元ヨリ何等ノ反應ヲ認メザリキ。小數ノ例ヲ以テ超顯微鏡の病原體ノ有無ヲ斷定スル能ハザルモ、將來ノ參考ニ供セントス。

培養上ノ性質。 本篇ニ追加セル四例中三例ニ就キテ細菌學の檢査ヲ試ミタルニ、第十一例ニテハ膿汁ノ培養成績陰性ニ終リ、第九例及ビ第十例ニ於テハ無菌の處置ノ下ニ切開シ、此際得タル膿汁ヲ寒天培養基、血液寒天培養基、並ニ肉汁

培養基ニ培養シ、共ニ略ボ同様ナル黃色醗膿性葡萄狀球菌ノ純粹培養ヲ得タリ。即チ此ノ二例ヨリ培養シ得タル細菌ハ、共ニ小ナル葡萄狀ノ球菌ニシテ、分子様遊動ヲ營ミ「メチレン」青、「フクシン」其他ニテ鮮明ニ着色シ、「グラム」陽性ナリ鞭毛「カプセル」ヲ有セズ、又芽胞ヲ作ラズ。普通寒天劃線培養上小サキ表面隆起セル圓形不透明ノ「コロニー」ヲナシテ發育シ、黃金色ノ色素ヲ產出ス。穿刺培養ニテハ穿刺線ニ沿フテヨク發育シ、培養基ノ上層ニ可成リ厚キ黃金色ノ「コロニー」ヲ生ズ。又「ラクムス」乳清ヲ濁濁、青變シ「ブイヨン」及ビ糖加「ブイヨン」共ニ十時間以内ニテ濁濁シ、二十四時間ニテハ既ニ器底ニ沈澱ス。二・〇%「ペプトン」水ヲ濁濁シ、「インドール」反應ヲ呈ス。「ゲラチン」上ニ發育シ之ヲ液化ス又馬鈴薯上ニモヨク發育ス。牛乳ヲ凝固スルコト稍々遅キモ後チ再ビ液化ス。胆汁中ニテモ亦發育シ、之ヲ更ニ寒天斜面培養基ニ移セバ却テ「コロニー」著明ニ突隆狀ヲ呈シ、色素產生旺盛トナルヲ見ル。血清加寒天、血液加寒天培養上兩菌株共ニ發育良好ニシテ、僅微ノ溶血作用ヲ示ス。

抵抗。 文献ヲ繙クニ、木様蜂窠織炎ノ病竈ヨリ分離セル細菌ノ毒力ニ就テハ云爲セル二三ノ人アルモ、其ノ抵抗力ニ論及セル者ナシ。予ハ第九例及ビ第十例ヨリ得タルニ菌株ノ抵抗力ニ就キ検査セルガ、其成績凡ソ次ノ如シ。

第一、日光ニ對スル抵抗 兩菌株ヲ寒天斜面ニ二十四時間(三十七度)培養シ其ノ一白金耳ヲ「ブロックシャーレ」ニ塗布シ、之ヲ更ニ「ペートル」シャーレ」ニ入レ、大正十二年三月二日間毎日午前十一時ヨリ午後三時迄、日光ニ照射セシニ、第一日ハ生存スルモ、第二日ニ至リ全部死滅セリ。

第二、生存期限 寒天斜面ハ室温ニ於テ六箇月以上生存シ、氷室内(攝氏五度ヨリ九度位ノ間)ニ三箇月ヲ經過スルモ尙ホ生存シ、三十七度ノ孵籠内ニテハ四箇月以内ニ死滅セリ。

第三、溫熱ニ對スル抵抗 兩菌株ノ二十四時間寒天斜面培養(三十七度)ノ二、〇瓊ヲ、滅菌生理的食鹽水二瓊中ニ浮遊セシメ、之ヲ各種溫度ノ浴槽内ニ安置シ、其抵抗力ヲ觀タルニ、六十度以上ノ溫度ニテハ十五分間加熱ニヨリ完全ニ死滅セリ(第六表參照)。

〔附註〕 以下諸表中ノ IXX トハ 症例第九第十ヲ示ス。

(第六表) IXX 兩株ノ 溫熱ニ對スル抵抗試驗表

時間 溫度		十五分	三十分	四十五分	一時間	一時間半	二時間
五十度	卅	卅	卅	卅	卅	+	+
六十度	-	-	-	-	-	-	-
七十度	-	-	-	-	-	-	-

〔附註〕 「卅」ハ培養上「コロニー」ノ發育旺盛ナルモノ、「+」ハ中等度ナルモノ、「+」ハ僅ニ發育スルモノ、「-」ハ全ク發育セザリシモノナリ。

第四、酸「アルカリ」類及ビ一二ノ外科消毒藥ニ對スル抵抗又第七表ニテ示スガ如シ。

(第七表) IXX 兩株ノ酸「アルカリ」類及ビ一二ノ外科消毒藥ニ對スル抵抗試驗表

藥液	時間				
	五分	十五分	三十分	四十五分	一時間
一・〇%硫酸	-	-	-	-	-
一・〇%鹽酸	-	-	-	-	-
一・〇%硝酸	-	-	-	-	-
四・〇%硼酸水	+	+	+	+	+
五・〇%石炭酸	-	-	-	-	-
一・〇%苛性加里	++	++	++	++	+
〇・一%昇汞水	-	-	-	-	-

〔附註〕 本試驗ニ供用セル菌液ハ二十四時間寒天斜面培養(三十七度)ノ二彪ヲ二・〇%「ペプトン」水一・〇坵ニ浮遊セシメタルモノナリ。

三・〇%「フォルマリン」	-	-	-	-	-
一・%「クレゾール」石鹼液	-	-	-	-	-
七〇・〇%「アルコホール」	-	-	-	-	-
五・%「チモールアルコホール」	-	-	-	-	-
五・〇%沃度丁幾	-	-	-	-	-
〇・二%沃度「ベンチン」	++	+	+	-	-
〇・〇〇五%「ヂチン」	++	++	++	++	-
二・〇%「クロールアミンT」	+	+	-	-	-

ヘモトキシン產生

晩近連鎖狀球菌ノ研究ハ盛トナルニツレ、葡萄狀球菌ノ研究モ亦稍々顧ルベキモノアリ。即チ前者ノ病原性、非病原性ヲ「ヘモトキシン」產生ノ有無ニヨリ決定セントスルモノアルガ如ク、後者ノ病原性ノ有無ヲモ同ジク之ニ據ルベキモノナリト主唱スル學者多キヲ數フルニ至レリ(例ヘバ *Neisser u. Veichsberg*)、予モ亦前述ノ如ク兩菌株ヲ以テ血液加寒天斜面培養上弱度ナガラモ之レガ產生アルヲ確メタルガ故ニ、今迄本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌ニ就テ嘗テ試ミラレザリシ「ヘモリジン」量ノ測定ヲ次ノ如ク行ヘリ。

先ヅ「ヘモリジン」トシテ兩菌株ノ二十四時間、一週間、二週間及ビ三週間、三十七度「ブイヨン」培養ノ濾過液及ビ二十四時間三十七度寒天斜面培養ノ生理的食鹽水浮游液(食鹽水一・〇%中ニ菌苔一・五瓏ヲ含ム)ヲ二十四時間振盪器ニカケテ得タル上澄液ノ五種ヲ以テシ、血球ハ各種動物ノ血球ヲ生理的食鹽水ニテ三回洗滌後、生理的食鹽水ニテ一・〇%ノ割合ニ稀メタルヲ使用セリ。

検査法 血球浮遊液一・〇%ニ毒素一・〇%ヲ加ヘヨク混和シ、二時間三十七度ノ孵竈ニ收メ、後チ室温ニ靜置スルコト二十四時間後ニ之ヲ検査セリ。此際「ブイヨン」培養濾過液ヲ以テセル場合ニハ「ブイヨン」ヲ、寒天培養上澄液ヲ以テセ

ル場合ニハ生理的食鹽水ヲ血球液ニ混ジテ、毫モ溶血作用ナキモノヲ對照トセリ(第八表及ビ第九表參照)。

(第八表) IX株ノ「ヘモトキシシン」產生量測定試驗表

血球種類	稀釋倍數	「ヘモリジン」	
		過液	●二十四時間「ブイヨン」培養濾過液
人血球	液原	++	液原
馬血球	倍二	++	倍二
緬羊血球	倍四	±	倍四
家兔血球	倍八	±	倍八
「モルモット」血球	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八
	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八
	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八
	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八

(第九表) X株ノ「ヘモトキシシン」產生量測定試驗表

血球種類	稀釋倍數	「ヘモリジン」	
		過液	●二十四時間「ブイヨン」培養濾過液
人血球	液原	++	液原
馬血球	倍二	++	倍二
緬羊血球	倍四	±	倍四
家兔血球	倍八	±	倍八
「モルモット」血球	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八
	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八
	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八
	液原	++	液原
	倍二	++	倍二
	倍四	++	倍四
	倍八	++	倍八

(附註) 上記ノ二表ニ於テ「++」ハ完全溶血、「+」ハ中等度ノ溶血、「±」ハ僅ニ溶血、「-」ハ極ク痕蹟ノ溶血ヲ示シ、「-」ハ全ク溶血セザルモノナリ。

即チ兩菌株殊ニX株ノ溶血作用ハ微弱且緩慢ニシテ、予ノ検査セル他ノ黃色醗膿性葡萄狀球菌ノ幾十株ニ比較シ遙ニ劣ルヲ知レリ。

動物試驗 今迄本病ノ病竈ヨリ檢出サレタル細菌ノ毒力ニ就テハ、諸家殆ド皆口ヲ揃ヘテ微弱リトナ唱フルニ拘ラズ之ヲ實驗的ニ研究セル人鮮ク、Kuzniow, Kusnetzoff, Krause, 西、田島、瀧本、村上等ノ數氏アルニ過ギズ。

予ハ第三例ニ於テ檢出シ得タル連鎖狀球菌ノ二十四時間肉汁培養一〇及ビ〇・五耗ヲ、各一疋ノ天竺鼠ノ皮下ニ注射セシニ、前者ニ於テハ二日目ニ斃レタルモ、後者ニ在リテハ局部ニ膿瘍ヲ作リシノミ、動物ハヨク生存セルヲ認メタリ。又第九例ニ於テ檢出セル黃色醗膿性葡萄狀球菌ヲ以テセル動物試驗成績ハ第十、第十一及ビ第十二表ニテ示スガ如シ。

(第十表) IX株ヲ以テセル家兎ニ於ケル動物試驗表

番動物 號物	體重瓦	注射部位	注射材料	注射量瓩	結 果
1	二〇五〇	耳靜脈	二十四時間寒天斜面培養(第一代)	一・〇	四日後死、剖檢上肝及ビ腎ニ無數ノ小膿瘍ヲ形成ス、心血ヨリ同一細菌ノ純粹培養ヲ得 同上死、兩腎ニ無數ノ小膿瘍アリ心血ヲ培養セシニ雜菌ノミ生エタリ 十日後死、兩腎ニ無數ノ小膿瘍アリ、心血培養上同上 生
2	一九八〇	同	同	〇・六	
3	一九一五	同	同	〇・三	
4	一八七〇	同	同	〇・一五	

(第十一表) IX株ヲ以テセル「モルモット」ニ於ケル動物試驗表

番動物 號物	體重瓦	注射部位	注射材料	注射量	結 果
1	四八〇	腹 腔	二十四時寒天斜面培養(第一代)	三・〇瓩	三日後死、兩腎ニ小膿瘍アリ、心血ヨリ同菌ヲ證明ス 二日後死、同上
2	四八〇	同	同	三・〇瓩	

動物 番號	體重 瓦	注射部位	注射材料	注射量 厘	結果
1	七五	腹腔内	二十四時寒天斜而培養(第五代)	三・〇	三日後死、剖檢セズ
2	七五	同	同	二・〇	十八時間後死、剖檢上輕キ腹水アリ、肉眼上他ノ變化ナシ
3	七三	同	同	一・五	八日後死、剖檢上同上
4	七〇	同	同	一・〇	四日後死、剖檢セズ
5	七〇	同	同	〇・五	生

(第十二表)

IX 株ヲ以テセル白鼠ニ於ケル動物試験表

[illegible]

14	13	12	11	10	9	8	7	6
六五	六五	六八	七〇	七二	七五	七〇	七〇	七五
同	同	同	同	同	背部皮下	同	同	頸部皮下
同	同	同	同	同	同上(第五代)	同	同	同上(第三代)
〇・三	〇・五	〇・八	一・〇	一・五	三・〇	〇・一	〇・二五	〇・五
同上	反應ナシ	生 六日後同上 二十日後同上	生 八日後小膿瘍形成、二十日後癰痕治癒	反應ナシ	生 六日後局部ニ小膿瘍形成、二十日後癰痕治癒	同上	同上	反應ナシ

予ノ第十例ニ於テモ亦黃色醗膿性葡萄狀球菌ヲ檢出セルガ、其ノ動物試驗成績ハ之ヲ一括シテ第十三表ヲ以テ示ス。

(第十三表) X株ヲ以テセル動物試驗表

7	6	5	4	3	2	1	番動物 號物
同	同	「モルモット」	同	同	同	家 兔	動物種類
四九五	四二五	四九五	一七四〇	一七五〇	一八五五	二二九五	體重瓦
同	同	腹腔	同	同	同	耳靜脈	注射部位
同	同	同	同	同	同	養(二十四時寒天斜面培養)(第一代)	注射材料
一・八	二・〇	三・〇	〇・一	〇・二	〇・三	〇・五	注射量瓦
生	生	五日後死、解剖上肉眼的變化ナシ	生	生	五日後死、兩腎臟同上	八日後死、兩腎臟ニ無數ノ小膿瘍	結 果

14	13	12	11	10	9	8
同	同	同	同	同	同	同
四一〇	五八〇	五五〇	四八〇	四七〇	四二〇	四一〇
同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同
〇・一	〇・二	〇・三	〇・四	〇・五	〇・六	〇・八
生	生	生	生	生	生	生

由是觀之予ノ症例ニ於テ檢出セル細菌モ概ネ其毒性薄弱ニシテ、前出諸氏ノ成績ト一致ス。

免疫學的研究

凝集反應

本病患者血清ト各種細菌トノ凝集反應、本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌ト各種血清トノ凝集反應、本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌ノ家兎免疫血清ト各種細菌トノ凝集反應及ビ黃色醗膿性葡萄狀球菌家兎免疫血清ト本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌トノ凝集反應等ナリ。

第一、本病患者血清ト各種細菌トノ凝集反應 第九例、第十例並ニ第十一例ニ就キ手術前日、四日前若クハ八日前患者ノ正中靜脈ヨリ採血シ、之レヨリ分離セル血清ヲ以テ、本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌並ニ諸他ノ細菌トノ凝集反應ヲ檢査セルモノニシテ、即チ此ノ血清ニ〇・五%ノ比ニ石炭酸ヲ加ヘ、數日後其ノ各種倍數稀釋液一〇%ニ就キ小試驗管内ニ入レ二十四時間寒天斜面培養ノ菌苔一〇%ニ就キ生理的食鹽水一〇%ニ浮遊セル菌液ノ一%ヲ加ヘテ、ヨク混和シ、六時間孵育ニ納メ、後チ室溫ニ放置スルコト十八時間後、其ノ成績ヲ觀察セシニ第十一例ハ凡テ陰性ニ終リ、第九例及ビ第十例ハ第十四表及ビ第十五表ノ如キ結果ヲ示セリ(對照トシテハ菌液ノ代リニ單ニ生理食鹽水ノミヲ加ヘタルヲ用ヒタリ)。

(第十四表) 第九例患者血清ト各種細菌トノ凝集反應試驗表

細菌		血清稀釋倍數	
本病株	IX株	+	++
黃色醗膿性葡萄狀球菌		++	+
白色醗膿性葡萄狀球菌		+	++
黃色非病原性葡萄狀球菌		-	-
醗膿性連鎖狀球菌		-	-
重球桿菌		-	-
綠膿桿菌		-	-
「チフス」桿菌		-	-
		10	
		50	
		100	
		200	
		400	
		800	
		1600	
		3200	

(第十五表) 第十例患者血清ト各種細菌トノ凝集反應試驗表

細菌		血清稀釋倍數	
本病株	IX株	+	++
黃色醗膿性葡萄狀球菌		++	+
白色醗膿性葡萄狀球菌		+	++
黃色非病原性葡萄狀球菌		-	-
醗膿性連鎖狀球菌		-	-
重球桿菌		-	-
綠膿桿菌		-	-
チブス桿菌		-	-
		10	
		50	
		100	
		200	
		400	

〔附註〕 上ノ兩表ニ於テ「++」ハ凝集塊全ク管底ニ沈澱シ、上方清澄ナルモノ「++」ハ大部分管底ニ沈澱セルモノ尙ホ上方混濁セルモノ「+」ハ管底ニ殆ド沈澱セズ、液全體ニ凝集塊浮遊セルモノ「±」ハ極ク痕蹟ニ凝集塊浮遊セルモノニシテ「-」ハ全ク凝集反應陰性ナルヲ示ス。以下皆之ニ倣フ。

第二、本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌ト各種血清トノ凝集反應ハⅩ及ビⅨ兩株ニ就キ前記ト同様ノ方法ニテ檢査セリ。
其ノ成績第十六表及ビ第十七表ノ如シ。

(第十六表) Ⅹ株ト各種血清トノ凝集反應試驗表

血清ノ種類	血清稀釋倍數	健康「ラツテ」	健康「モルモット」	健康「モルモット」	健康「モルモット」	健康家兔	健康家兔	健康家兔	健康犬	健康山羊	健康山羊	健康綿羊	健康綿羊	健康豚	健康馬	「フラス」診斷用家兔血清	赤痢本型菌診斷用家兔血清	北里製「フラス」血清	北里製多價連鎖狀球菌血清	健康人	健康人	健康人	脊椎骨痠	淋毒性副腎丸炎	水痘	微毒ノ疑	丹毒	溶血性連鎖狀球菌ニヨル丹毒	白色醗酵性葡萄狀球菌ニヨル下腿筋炎	黃色醗酵性葡萄狀球菌ニヨル下腿筋炎	黃色醗酵性葡萄狀球菌ニヨル腹筋炎
10	++	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
400	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表第七十第) X株ト各種血清ノ凝集反應試驗表

血清ノ種類	血清稀釋倍數	血清ノ種類													
		黄色醃腸性葡萄狀球菌ニヨル腹壁筋炎	黄色醃腸性葡萄狀球菌ニヨル下腿筋炎	溶血性連鎖狀球菌ニヨル丹毒	健康 人	北里製多價連鎖狀球菌血清	北里製「ヂフテリー」血清	赤痢本型菌診斷片家兔血清	「チフス」診斷片家兔血清	健康 馬	健康 豚	健康 犬	健康 家 兔	健康 家 兔	健康 家 兔
10	++	++	-	-	-	-	-	-	-	++	++	+	±	-	-
50	-	-	+	-	-	-	-	-	-	++	++	+	-	-	-
100	-	-	±	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-
200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第三、本病ノ病竈ヨリ檢出セル細菌ノ家兔免疫血清ト各種細菌トノ凝集反應ハIX株及ビX株ヲ以テセリ、先ヅ家兔ヲ免疫スルニ、兩菌株二十四時間三十七度寒天斜面培養ノ菌苔一〇・〇珎ヲ、生理的食鹽水一〇・〇珎ニ浮游シ、之ニ〇・五%ノ比ニ石炭酸ヲ加ヘタルヲ、五日乃至一週間ノ間隔ヲ置キ、〇・二五珎ヨリ初メテ以下第四回迄ハ漸次菌量ヲ倍加シ、第五回ニハ三・〇珎ヲ耳靜脈内ニ注射セリ。最終ノ注射後九日目ニ頸動脈ヨリ總採血ヲナシ、血清ヲ分離シ、之ニ〇・五%ノ比ニ石炭酸ヲ滴加シ、永室内ニ保存シ、用ニ臨ミテ使用セリ。檢査法ハ前述ト異ラズ、其成績第十八表及ビ第十九表ノ如シ。

(第十八表) IX株家兔免疫血清ト各種細菌トノ凝集反應試驗表

菌種及ビ菌株	血清稀釋倍數	本病		黃色膿性葡萄狀球菌								黃色非病原性葡萄狀球菌	溶血性連鎖	狀球菌	重球	綠膿桿菌	「チフス」桿菌	「コレラ」弧菌
		X	IX	朴○守株	李○來株	金○在株	權○習株	尹○變株	黃○福株	株	株							
10	10	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	±	++	-	±	-
50	50	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	-	+	-	-	-
100	100	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	-	-	-	-	-
200	200	++	++	++	++	++	++	++	++	+	++	-	-	-	-	-	-	-
400	400	+	+	+	+	++	+	±	++	-	-	-	-	-	-	-	-	-
800	800	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1600	1600	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3200																		
6400																		
12800																		
25600																		

(第十九表) X株家兔免疫血清ト各種細菌トノ凝集反應試驗表

菌種及ビ菌株	血清稀釋倍數
10	10
50	50
100	100
200	200
400	400
800	800
1600	1600
3200	
6400	
12800	
25600	

菌株	血清稀釋倍數						
	10	50	100	200	400	800	1600
IX株	++	++	++	++	+	-	-
X株	++	++	++	++	++	-	-
黃○福株	++	++	++	++	++	+	-

カステラニ氏吸收試驗

以上ノ凝集反應成績ヨリスルニ、兩菌株ハ其ノ相互間並ニ他ノ黃色醗膿性葡萄狀球菌トノ間ニ、大差ナキヲ認ム、由リテ其ノ成績ヲ尙ホ一層吟味スルノ必要ヲ感ジ、兩菌株並ニ黃色醗膿性葡萄狀球菌(黃○福株)家兎免疫血清一〇倍稀釋液ノ三・〇瓩ニ生理的食鹽水二四・〇瓩、五・〇%石炭酸水三・〇瓩ヲ混ジ、之ニ二十四時間寒天培養三斜面ヲ加ヘ、十二時間三十七度ノ孵籠内ニ保チ、其ノ上澄液ニ更ニ上記ト同一量ノ菌苔ヲ混ズ、之ヲ反覆スルコト三回ニシテ遠心沈澱セシメ、其ノ上澄液ヲ取リテ吸吸後ノ血清ト爲セリ(第二十一、第二十二及ビ第二十三表參照)。

(第二十一表)

IX株家兎免疫血清ニヨリ検査セルカステラニ氏吸收試驗表

黃色醗膿性葡萄狀球菌	X株	IX株	血清稀釋倍數	
			株	株
+	+	+	吸收前	100
++	++	++	吸收後	
++	-	+	吸收後	200
+	+	++	吸收前	
+	-	±	吸收後	400
++	-	+	吸收前	
-	-	-	吸收後	800
+	-	-	吸收前	
-	-	-	吸收後	1600
-	-	-	吸收前	
-	-	-	吸收後	

(第二十二表)

X株家兎免疫血清ニヨリ検査セルカステラニ氏吸收試驗表

菌株	血清稀釋倍數	
	吸收前	吸收後
IX株	吸收前	吸收後
	吸收前	吸收後
X株	吸收前	吸收後
	吸收前	吸收後
黃色醗膿性葡萄狀球菌	吸收前	吸收後
	吸收前	吸收後

〔附註〕 黃色醗膿性葡萄狀球菌ハ「黃○福株」ヲ用ヒタリ。以下第二十二表及ビ第二十三表ニ於テモ同様ナリ。

黄色醗膿性葡萄狀球菌	IX株	X株
++	++	++
+	-	-
++	++	++
±	-	-
++	++	++
-	-	-
++	++	++
-	-	-
++	++	++
-	-	-
+	+	+
-	-	-
+	-	-
-	-	-
±	-	-
-	-	-

(第二十三表) 黄色醗膿性葡萄狀球菌家兔免疫血清ニヨリ検査セルカステラニ氏吸收試驗表

菌株	血清稀釋倍數	
	吸收前	吸收後
IX株	++	±
	++	++
X株	++	++
	++	++
免疫元株	++	++
	++	++

前三表ヲ見テ明カナルガ如ク、本兩菌株ト黄色醗膿性葡萄狀球菌トノ攝取簇ハ同一ナリト謂フベシ。

溶菌作用 又溶菌作用ノ有無ヲ檢スルガ爲メニ、諸種稀釋度ノ兩菌株家兔免疫血清一・〇・〇・〇倍ニ稀釋セル新鮮、

「モルモット」血清〇、五耗ヲ加ヘ、次デ生理的食鹽水五〇〇・〇・〇・〇耗中ニ生菌一・〇・〇耗ヲ混ジタル菌液一・〇・〇耗ヲ添加シ、之ヲ三時間三十七度ノ孵籠ニ保チ、之ニ四十五度ニ冷却シタル溶解寒天斜培養基一〇・〇・〇耗ヲ混和シ、ペトリー氏「シヤール」ニ移シ、再ビ十八時間孵籠ニ納メテ検査セシモ、其ノ結果ハ何等溶菌現象ノ起レルヲ認メズ。

沈澱反應 前記試驗ト同様ノ方法ニテ兩菌株ノ家兔免疫血清ヲ作り、又兩菌株及ビ黄色醗膿性葡萄狀球菌(黃〇福株)

ヲ二十四時乃至一週間「ブイヨン」中ニ培養シ、ベルクフェルド氏濾過器ニテ濾過シテ三種ノ免疫元ヲ製シ、此ノ二ツヲ以テ沈澱反應ヲ試驗セリ(第二十四表及ビ第二十五表参照)。

(第二十四表) IX株家兔免疫血清ヲ以テセル沈澱反應試驗表

試驗管		番號		對 照		番號		試驗管	
及ビ稀釋		及ビ稀釋		8 7 6 5 4 3 2 1		及ビ稀釋		及ビ稀釋	
○ 五 (食生 鹽理 水)		○ 五 (家兔 血清)		○ 五 (家兔 血清)		○ 五 (第一 健康 血清)		○ 五 (百 倍)	
○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)	
○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)	
○ 五		○ 五		○ 五		○ 五		○ 五	
IX		IX		IX		IX		IX	
株		株		株		株		株	
X		X		X		X		X	
株		株		株		株		株	
黃色醗菌性		黃色醗菌性		黃色醗菌性		黃色醗菌性		黃色醗菌性	
一週培養		一週培養		一週培養		一週培養		一週培養	

(第二十五表) X株家兔免疫血清ヲ以テセル沈澱反應試驗表

試驗管		番號		對 照		番號		試驗管	
及ビ稀釋		及ビ稀釋		8 7 6 5 4 3 2 1		及ビ稀釋		及ビ稀釋	
○ 五 (食生 鹽理 水)		○ 五 (家兔 血清)		○ 五 (家兔 血清)		○ 五 (第一 健康 血清)		○ 五 (百 倍)	
○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)		○ 五 (五 十 倍)	
○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)		○ 五 (原 液)	
○ 五		○ 五		○ 五		○ 五		○ 五	
IX		IX		IX		IX		IX	
株		株		株		株		株	
X		X		X		X		X	
株		株		株		株		株	
黃色醗菌性		黃色醗菌性		黃色醗菌性		黃色醗菌性		黃色醗菌性	
一週培養		一週培養		一週培養		一週培養		一週培養	

照 對		8 7 6	
○	○	○	○
五	五	五	五
(食生)	(家第)	(家第)	(家第)
(鹽理)	(家第)	(家第)	(家第)
(水的)	(血清)	(血清)	(血清)
○	○	○	○
五	五	五	五
-	-	-	-
-	-	-	-
-	-	-	-
-	-	-	-
-	-	-	-
-	-	-	-

要之兩菌株家兔免疫血清ヲ以テセル沈澱反應ニハ著シキ差異アルヲ認メズ。

茲ニ本兩菌株性狀ヲ考察スルニ、普通ノ黃色醗膿性葡萄球菌ト異ル所アルヲ認メザリシナリ。

四、病理解剖學的研究

肉眼の所見 之ヲ予ノ例ニ就キ觀ルニ、

第一例ニ於テハ、筋肉ハ固クシテ恰モ癰瘍樣組織ノ如ク、其ノ一部ニ弛緩セル肉芽樣組織在リ。第二例ニ於テモ亦、直腹筋ノ下層ニ同ジク白色ニ浸潤セル肉芽樣ノ組織ヲ發見シ。第三例ニテハ、皮膚ハ切開ノ際、刀ニ鞏韌ナル抵抗ヲ覺エ、切開ハ容易ナラズ、皮膚及ビ皮下組織ノ切面蒼白、纖維狀ニシテ、筋層ニ達スル迄厚徑約二・〇糰ヲ算シ、出血少カリキ。第四例ニ於テ、皮膚ハ浮腫狀ニ肥厚シ、胸鎖乳頭筋木板樣硬固、著シク肥厚シ、中ニ僅微ノ汚穢色ヲ呈スル肉芽樣組織塊在リタリ。第七例ニ於ケル組織ハ、一般ニ壞疽狀脆弱ニシテ、血液ニ富ミ。第八例ニテハ皮膚ト其ノ下層トノ間ニ輕キ癒着在リ、深部ニ進ミテハ筋肉黃白色、超鷄卵大硬結ヲ成シ、之ヲ切開セシニ、癰瘍樣ニシテ約〇・六糰ノ厚サヲ有シ内ヨリ赤黑色ノ肉芽現ハル。第九例ニ於テハ皮膚切開ヲ加ヘシニ、組織著シク鞏韌ニシテ刀刃ノ抵抗強シ、皮膚層約一・〇糰ニ肥厚シ、蒼白、出血多カラズ、只暗赤色血液少許流出セルノミ、皮下組織、筋膜及ビ筋層ハ更ニ甚シク肥厚シ且ツ鞏韌、全ク臄樣乃至軟骨樣ニシテ、漸ク鈍的ニ哆開シ、其ノ下層ニ膿瘍ヲ發見シ得タル程ナリ、皮膚ヨリ膿竈ニ至ル迄ノ厚徑三・五糰第十一例ニ於テハ皮膚切開ノ際、刀ニ甚シキ抵抗アリ、乾固鞏韌ナル牛皮ヲ切ル如シ、深部組織ハ辛ジテ銳的ニ刀ヲ以テ切開セシニ、更ニ固ク軟骨ヲ切ルガ如シ、皮膚及ビ皮下組織白色ニシテ出血少ク、筋肉モ亦固有ノ色澤及ビ

質性ヲ失ヒテ腱狀ニ變化セリ。微小ナル一動脈ヨリノ出血ヲ止ムルニ、組織ノ餘リ固キ爲メ、止血鉗子ニテ之ヲ撮ム能ハズ、周擁結紮ニヨリ止血シ得、更ニ深部ニ於テ頸椎ニ近ク組織ノ一小部ノミ硬度異様ニ脆ク、其ノ左方ニ膿竈介在セリ。

予ノ經驗及ビ Kusnetzoff, Kirsse, 長曾我部、太田、關場、Cajasso, Powers, 田島、Phedinga, 瀧本、村上諸氏ノ所見等ヲ綜合觀察スルニ、病變ハ主トシテ皮膚及ビ皮下組織乃至ハ筋肉ニ占居シ、鞏固ニシテ、切開ニ際シ腱、軟骨乃至木板ヲ切ルガ如キ感ヲ與フ。色概ネ蒼白又ハ灰白ヲ呈シ、出血多キモノモアレドモ大多數ハ出血ニ乏シク、時ニ豚脂様ノ感アリ膿竈ヲ作ルコトアリ、或ハ全ク然ラザルコトアリ、而モ板狀硬固ナル諸層ノ下ニ潜存スルヲ常トナシ、然ラザルモノノ多クハ深部ニ壞死狀塊ヲ有ス。

組織學的検査 予ノ検査材料ハ手術時癰痕様組織、膿竈壁等ヨリ取り、「バラフシ」又ハ「ツエロイデン」包埋ニヨリ切片ヲ作り、「ヘマトキシリン・エオジン」複染色、ワンギーソン染色、フランター氏彈力纖維染色、及ビ多染色性「メチレン」青染色等ヲ施セリ。

予ノ症例ニ於ケル組織的検査所見ニ就キ通覽スルニ、

第一例 ニ於テ、病變ノ主竈ト思ハルル部、即チ恰モ癰痕組織様ナリシ胸鎖乳頭筋及ビ膿瘍底トノ間ヨリ切取セル組織標本ヲ、染色ノ上検査セルニ、所々ニ細胞ノ強ク集簇セル部在リ、此細胞ハ主トシテ遊走細胞ナルモ、結締織成形細胞 (Fibroblasten) 及ビ新生セル血管ヲ見ル、遊走細胞ノ種類ハ所ニヨリテ一樣ナラズ、或部分ニ於テハ多核性白血球ノ數多ク、他ノ部分ニ於テハ單核球密集セリ、而シテ此單核細胞ノ多クハ、小型ニシテ原形質ニ乏シキ淋巴球ナルモ、傍ラ原形質ニ富メル大單核細胞ノ存スルアリ、コハ其ノ形狀ヨリスレバ Polychaeten 若クハ組織球ニ相當ス、而シテ斯ノ如キ遊走細胞ハ全部平等ニ存在セズシテ、或部位ニ於テハ多核性白血球ノ密集セルアリテ、細胞ノ間ニ纖維素ノ形成ヲ認メ、炎症變化トシテ正ニ急性ノ像ヲ呈セルヲ見ル。然レドモ他ノ部位ニ於テハ炎竈ハ稍々陳舊性ニ傾キ、多核性白血球ノ數乏シク、主トシテ單核性細胞、殊ニ原形質ニ富メル組織球様ノ細胞ト、増殖セル結締織成形細胞トヨリナルヲ見ルモ、結締織纖維

ノ形成ニ乏シクシテ、一見肉芽竈ノ像ヲ呈ス、更ニ陳舊ナル部位ニ於テハ、遊走細胞漸次乏シクナリ、纖維性物質ノ形成著シクナリテ、組織ハ癰痕狀形成ニ傾クニ至ル。

斯ノ如ク細胞性ニ富メル部ト、之ニ乏シキ部位ハ、相隣接シテ存シ、急性炎症ノ時ニ漸次惡急性ノ肉芽性炎ニ移行シ、更ニ著明ナル癰痕形成ニ移行スルヲ認ム。

第四例 ニ於テハ炎症ノ主竈ハ筋組織中ニ在リ、慢性筋炎ノ像ヲ呈ス、即チ結締組織増殖シ、筋纖維間ニ侵入シ、筋纖維自己ハ萎縮ニ陥リ、所々血管ノ周圍ニ多數ナル圓形細胞ノ浸潤ヲ見ル。

第九例 ニ於ケル病變ノ主竈部ヲ檢鏡スルニ、眞皮内ノ比較的表層ニ近キ部ノ血管ニ沿ヒテ、可成リ著明ノ淋巴球並ニ大單核細胞ノ浸潤アリ、皮脂線、汗腺及ビ毛囊ニ變化ナク、皮下脂肪組織ノ葉間結締組織内ニモ同様ナル細胞浸潤ノ、稍々特ニ著明ニ集團セルヲ見ル。皮下結締組織束ハ「コラゲーン」ニ變性シ、複雑ニ錯綜シ、束間ニハ幼若ナル結締組織細胞甚ダ多量ニ増殖シテ、是等ノ束ヲ多數ノ小束ニ分離セリ、其間著明ナル淋巴球、大單核細胞及ビ組織球ノ浸潤アリ、而モ此浸潤ハ血管ノ周圍ニ於テ特ニ著明一層ニ現ハレリ。之等ノ變化ハワンギーン染色ニ於テ特ニ著明ニ認メラレ、「コラゲーン」ニ變性セル結締組織束ハ何レモ光澤アル鮮紅色ニ着色セリ。フランター氏彈力纖維染色ニヨリ眞皮内ノ彈力纖維ハ肥厚シ、皮下結締組織内ノ大ナル、在來ノ彈力纖維ハ、斷裂シテ排裂ヲ亂シ、極メテ短ク且ツ其量大ニ減少セルヲ見ル。多染色性「メチレン」青ヲ以テ染色シタル標本ニ於テ「マスト」細胞ノ浸潤ナシ。

第十一例ノ病竈 ニヨリ切取セル標本ノ檢鏡上所見ハ、凡ソ第九例ニ於ケルト大差ナシ、單ニ本例ニ於テハ前例ニ於ケルヨリモ皮下結締組織ノ「コラゲーン」ニ變性セルモノ更ニ多數ニ殘存シ、肉芽樣幼若ナル結締組織細胞ノ増殖遙カニ劣レリ。ワンギーン染色ニ於テハ到所ニ「コラゲーン」ニ變性セル結締組織束ハ、何レモ光澤アル鮮紅色ニ着色シ、纖維性結締組織本來ノ構造ヲ失ハズ。フランター氏彈力纖維染色標本ニ於テハ、眞皮内彈力纖維稍々肥厚シ、且ツ増殖セルノミナラズ、上皮乳頭ニ沿フテ極メテ微細ナル幼若纖維ヲ多數ニ派出セリ、皮下結締組織内ニ於テハ、極メテ微細ナル幼若纖維稍々増加セ

ルト共ニ、稍々大ナル在來ノ纖維ハ斷裂シテ、甚シク其ノ排裂ヲ亂シ、散亂セルガ如ク個々ニ分離セルモノ多ク、又稀ニ束狀ヲナスモノ在ルモ、何レモ極メテ短シ、且ツ各纖維モ甚シク大小不同ナリ。多染色性「メチレン」青ニテ染色検査セシモ「マスト」細胞ノ浸潤ヲ認ムル能ハズ。

次ニ同例ノ比較的病變部ヲ離レテ健康部ニ移行セントスル箇所ヨリ得タル切片ヲ、同ジク種々ノ染色法ヲ施シテ檢スルニ、眞皮ノ結締組織稍々肥厚シ、「コラゲーン」ニ變性ヲ起セルモ、病變ノ主竈部ヨリハ其ノ度輕ク、且ツ細胞浸潤少ナシ、皮下組締組織モ亦、同様ニ「コラゲーン」ニ變性シ、筋層ニ近キ部ノ血管周圍ニ前記ト同様ノ細胞浸潤アリ、尙ホ筋間結締組織内ニ同様ノ細胞浸潤著明ニ現ハル、其レニ接スル筋肉ハ、或ハ甚シク萎縮シテ細ク、既ニ一部斷裂シ、或ハ全ク其ノ横紋ヲ失ヒ、同質性ニ染色セリ、而モ甚ダ大小不同トナリ、一部壞死ニ陥リ、筋細胞核モ稍々増加セリ、浸潤ハ稍々深ク各筋纖維ノ間迄侵入シ、爲ニ筋纖維ガ浸潤内ニ埋沒セラレタル如キ狀ヲ呈スル部アリ、其ノ部ハ特ニ萎縮及ビ懷死強ク筋纖維ノ斷裂セルモノモアリ。

自家ノ所見並ニ先進 Martynow, Merkel, 太田、Powers, 田島、Grant, Thévenot, 瀧本、村上、稻田氏等ノ病理組織學的所見ノ要點ヲ記スレバ、炎症ハ皮下結締組織ニ蔓延シ、進ンデハ筋間結締組織及ビ筋肉ヲ侵襲シ、甚シキニ至テハ尙ホ更ニ其ノ下層ニ波及ス、而シテ是等ノ侵害ノ程度ニハ自ラ差違アリテ一様ナラズト雖ドモ、結締組織増殖ノ主ナルモノ、圓形細胞浸潤ノ主ナルモノ及ビ此ノ兩者ヲ略ボ平等ニ具有スルモノトノ三種アリ。然レドモ大體ニ於テ結締組織成形細胞ノ増殖ト、淋巴球及ビ組織球ノ遊走、浸潤アルコト明カナリ、而シテ在來ノ結締組織纖維ハ「コラゲーン」ニ變性セルモノ多ク、彈力纖維ハ斷裂散亂シ、一部ノ新生ヲ見ルニ過ギズ。

要之本病ニ於ケル病變ハ化膿性炎ニ續發セル慢性増殖性炎ナルヲ主張シ Martynow, Merkel, 太田、Powers, 田島、Grant, 瀧本、Thévenot, 村上等諸氏ト共ニ、本病ノ本態ヲ以テ腫瘍或ハ特殊炎症ニ歸セシメントスル說ヲ否定セントス。若シ異様ナル細胞又ハ組織ノ混在セルコトアリトセンカ、ソハ將シク本病ニ非ラズシテ、眞正腫瘍或ハ他種ノ疾患タルベシ。

五、血液像所見

既ニ本病ノ本態ハ炎症性疾患ナリト確定セラレタリ、然レドモ寡聞未ダ本病ノ血液像所見ヲ追究セル人アルヲ聽カザルハ予ノ不思議トスル所ナリ。予ハ三例ニ就キ其ノ所見ヲ調査スルノ機會ヲ得タリ。

抑々病的白血球增多症ハ生體ニ加ハルル諸種ノ刺激ニヨリ來ル、特ニ炎症性刺激アレバ其反應トシテ *Fiedermann* 氏ノ所

謂 *Infectious Leukocytose* ヲ來ス。然レドモ白血球增多ハ必ズシモ炎症ニ必極

素ニハ非ラザルナリ、又腫瘍或ハ非傳染性疾患トノ鑑別ニ絶對的ノ價值ヲモ有スルモノニモ非ラザルナリ、然レドモ *E. Diller* 氏ノ回盲部真正腫瘍ト蟲樣突起炎トヲ血液検査ニヨリ明カニ區別シ得タリシ等ノ例多キヲ以テ、其ノ價值ノ重要視スベキハ勿論ナレドモ、白血球增多現象ハ時トシテ真正腫瘍ノ場合ニモ、出現スルコトアルガ故ニ、此際爾他ノ臨牀的症狀ヲ顧慮スルト共ニ、白血球其ノ他ノ血球要素ニ充分ナル注意ヲ拂フベキナリ。今先ヅ木様蜂窠織炎ノ血液像所見ニ就キ、自家ノ症例ニ就調べキタル成績ヲ以下摘記スベシ。

(第二十六表) 第九例患者ノ血液像所見表

種 類	手術前日	手術後九日目
赤 血 球 數	4,860,000	5,150,000
血 色 素 量	82.0%	85.0%
白 血 球 數	10,950	8,850
中 性 嗜 好 細 胞	79.1%	74.4%
「エオジン」嗜好細胞	2.0%	1.5%
淋 巴 球	14.8%	20.0%
大單核細胞及ビ移行型	5.1%	4.1%

テ計測セリ以下同ジ

【附註】

血色素量ハザリー氏血色素計ヲ以

【備考】 本例ニ於ケル手術前血液検査ハ、既ニ局部ノ化膿徴候著明ナリシ時ニ行ヒ、手術後ノ検査ハ

創面ノ大半治癒シ、患者ノ元氣恢復セル後ノ所見ナリ。

(第二十七表) 第十一例患者ノ血液像所見表

種 類	手術七日前	手術後十三日目
赤 血 球 數	3200000	4440000
血 色 素 量	75.0%	82.0%
白 血 球 數	23900	12800
中 性 嗜 好 細 胞	80.7%	72.75%
「エオジン」嗜好細胞	3.5%	.5%
淋 巴 球	1.5%	19.5%
大單核細胞及ビ移行型	3.25%	1.25%

〔備 考〕 本例ニ於ケル手術七日前ニ於ケル局部ノ狀況ハ外部ヨリ

波動明カナラザリシモ、其ノ二日後ニハ明カニ化膿ノ徴候アリタリ。

此兩例ニ於ケル血液像検査ヨリ按ズルニ、本病ノ晚期即チ化膿現ハレテヨリ後ノ血液所見ハ、未ダ例數少キガ故ニ絶對的トハ稱シ難キモ、白血球ノ數的並ニ中性嗜好多形核細胞ノ質的增加アルニ反シ赤血球並ニ血色素量ノ減少少キガ如シ
 今本病ノ比較的初期即チ未ダ硬結、浸潤甚ダ鞏固ニシテ、毫モ化膿ノ徴ナカリシモノノ一例ニ於ケル血液像所見ヲ第二十八表ニ掲ゲン。

(第二十八表) 第十二例患者ノ血液像所見表

種 類	發病後五日後ノ所見
赤 血 球 數	5300000
白 血 球 數	6800
中 性 嗜 好 細 胞	66.0%
「エオジン」嗜好細胞	3.0%
淋 巴 球	29.4%
大單核細胞及ビ移行型	1.6%

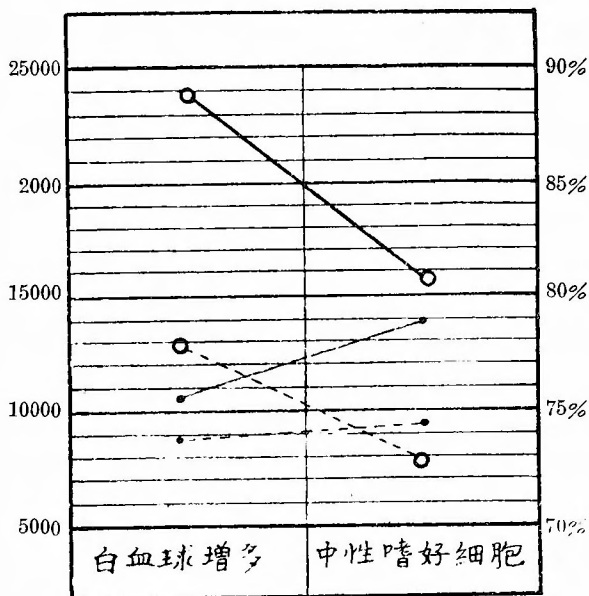
即チ本例ニ於テハ白血球ノ數的變化並ニ中性嗜好細胞ノ質的變化ヲ證明セズ。此一斑ヨリ推察スルニ本病初期ニ於ケル血液像所見ヲバ、直ニ他ノ疾患トノ鑑別診斷上ニ應用スルガ如キコトハ些カ早計ニ失スベシ。

千九百六年 Gibson 氏ハ蟲様突起炎ニ因ル急性腹膜炎ニ於テ、疾病ノ豫後及ビ組織學的變化ノ度ヲト知セント欲シ、白血球增多ト中性嗜好細胞トノ間ニ、一基本抵抗線ナルモノヲ設ケリ。木様蜂窠織炎モ今迄一種不可解ナル疾患ト見做サレ、其ノ豫後ノ如キモ大ニ不良視セラル、今同氏ノ想定線ニ倣ヒ手術ニヨリ治癒ノ轉歸ヲ取リシ、上記第九例及ビ第十一例ノ抵抗線ヲ模スコト第三圖ノ如シ。

症例	手術前					手術後				
	白血球數	中性嗜好細胞%數	淋巴球%數	N.L. Index	Gibson氏抵抗線	白血球數	中性嗜好細胞%數	淋巴球%數	N.L. Index	Gibson氏抵抗線
第九例	一〇九五〇	七九・一〇%	一四・八〇%	五・三四	上昇	八八五〇	七四・四〇%	二〇・〇〇%	三・七二	殆ど並行
第十一例	二三九〇〇	八〇・七五%	一二・五〇%	六・四五	下降	七二・七五%	七二・七五%	一九・五〇%	六・五〇	下降
第十二例	六八〇〇	六六・〇〇%	二九・四〇%	二・二四	下降	一二八〇〇	七二・七五%	一九・五〇%	六・五〇	下降

(第二十九表) 本病ニ於ケル血液「N.L.」Index 並ニ Gibson 氏抵抗線ノ状態

(第三圖)本病ニ於ケル Gibson 氏抵抗線



- 第九例ノ手術前
- 第九例ノ手術後
- 第十一例ノ手術前
- 第十一例ノ手術後

此第三圖ニ就テ之ヲ觀ルニ、第九例ニ於テハ手術ニ前抵抗線遙ニ上昇セシガ、手術後下降シ、第十一例ニ於テハ手術前リ下降シ、手術後モ尙ホ引續キ下降シツ、アリタリ。

昨年大原氏ハ同ジク蟲樣突起炎ニ就テ、血液ノ Neutro-Lymphocytan-Index ヲ算出シ、豫後判斷上有意義ナルヲ公ニセリ。之ヲ本病ノ三例ニ就キテ見ルニ次ノ第二十九表ニテ示スガ如シ。

要之予ノ乏シキ症例ニ於ケル血液像ヲ以テ一般的價值ヲ論ズル能ハザレドモ、上述ノ検査成績ガ他ノ學者ノ研究ニ資シ他日正鵠ナル判斷ヲ下シ得レバ予ノ幸之ニ勝ルナシ。

六、結 論

一、本病ハ獨リ特有ナル臨牀的症候ニヨリ獨立セシムベキ疾患ナリトス。

一、從來本病ノ病竈ヨリ幾種ノ病原菌發見セラレタルモ、黃色膿膿性葡萄狀球菌尤モ屢々證明セラレタリ。

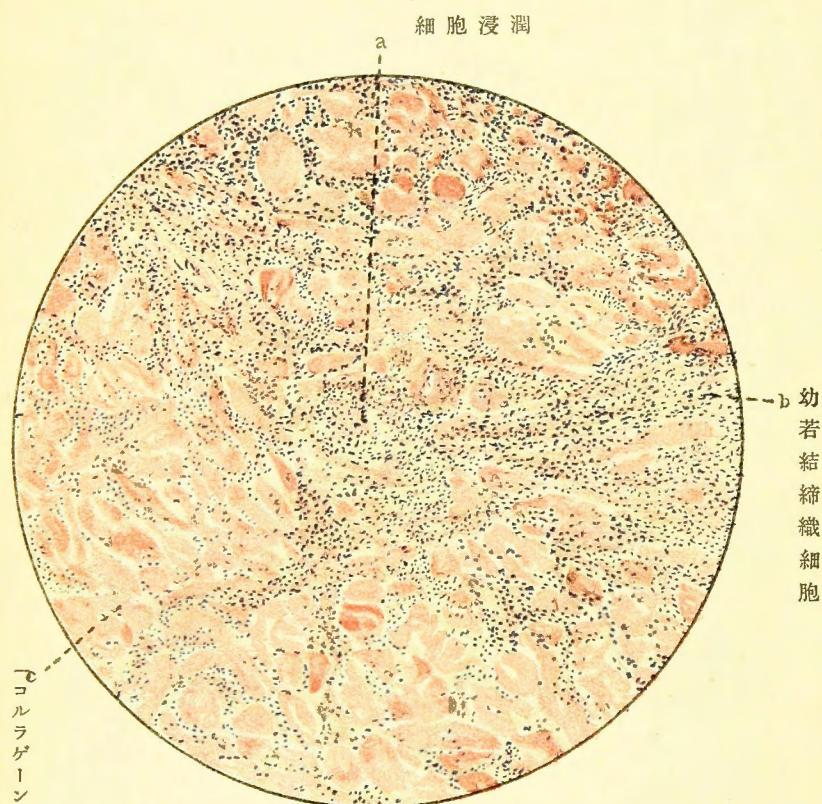
一、自家實驗例ニ於テハ病竈ヨリ檢出セル細菌ノ詳細ナル生物學的研究上、黃色膿膿性葡萄狀球菌ハ本病ノ病原菌タルコト確實ナリ。

一、本病ノ血液像所見ハ今迄全ク他ノ學者ノ穿鑿セルモノナシ、自家ノ症例ニ就キテ云ヘバ、發病初期ニ於テハ著シキ變化ナク、晚期即チ化膿ト相前後シテ白血球ノ數的並ニ中性嗜好多形核細胞ノ質的增加アルニ反シ、赤血球並ニ血色素量ノ減少少シ、而シテ其ノ診斷上乃至豫後上價值如何ハ、尙ホ多數ノ同種報告アルヲ特チテ初メテ正鵠ナル判斷ヲ下シ得ベシ。

本論文前半ハ、專ラ京都帝國大學醫學部外科教授伊藤博士ノ示教ト、清野博士、志賀博士恩師外科長植村博士、德光博士及ビ椎葉教授ノ指導、助言ニ依ル所ト、辻(廣)博士、土井博士及ビ濱西學士ノ配慮ヲ仰ギ、後半ニ就キテハ校長 多シ、稿ヲ終ルニ莅ミ之等ノ諸賢ニ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

文 獻

- 1) 朴 昌 澤 木樣蜂窠瘻ニ就テ。京都醫學會雜誌、大正十二年、第二十卷、二百九十七頁ヨリ三百十六頁迄、四百七十九頁ヨリ四百九十六頁迄、五百七十九頁ヨリ五百九十八頁迄、七百二十三頁ヨリ七百三十五頁迄。
- 2) 稻 田 博 朴昌澤ノ「カルツツレグモネ」ニ就テノ講演ニ對シ追加一例。朝鮮醫學會雜誌、大正十年、第三十三號、百四十四頁。
- 3) 朴 昌 澤 再、レクター・ユー・氏木樣蜂窠瘻ニ就テ並ニ其一例。朝鮮醫學會雜誌、大正十年、第三十五號、三百八十九頁。
- 4) 同 人、再、木樣蜂窠瘻ノ數例ニ就テ。日本外科學會雜誌、大正十二年、第二十四回、百四十九頁。
- 5) 同 人、所謂木樣蜂窠瘻ノ細菌學的及ビ組織學的研究。同雜誌、同年、同回、同頁。
- 6) 村上謙次郎、再、木樣蜂窠瘻ニ就テ。臨牀醫學、大正十二年、第七號、五百九十二頁、皮膚科紀要第三卷第三號ニ於テ下村四郎氏ノ本病一例報告アルモ既ニ本稿完結後ナリシ故本文ニハ其ノ要旨ヲ引用スル能ハザリシヲ憾ム。



第 一 圖

項部木様蜂巢織炎(自家症例中ノ第十一例)

患者 朴 姓 女 三十八歳

「コルラゲーン」ニ變性セル結締織束



第 二 圖

項部木樣蜂巢織炎 (自家症例中'第十一例)

患者 朴姓女 三十八歲